

第7回 双葉町復興推進委員会 議事概要

■日時：平成26年5月29日(木) 午後1時00分～4時30分

■場所：双葉町いわき事務所 2階大会議室

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 議事

(1) ワークショップ

テーマ：町民の今後の暮らしと町の復興について

上記のテーマで現在の課題・達成の手段・将来のビジョンの3段階の観点から、委員をA～Dの4つの班に分けて座談会形式(ワークショップ)にて議論を行った。

※ワークショップについて

- ・班ごとに自由な議論を行う。
- ・各委員の意見はカード(付箋紙)に書いて班内で共有できるようにする。
- ・意見(付箋紙)を集約し、班ごとに模造紙にまとめる。

(2) ワークショップのグループ成果の発表

○ 各班より模造紙にまとめた成果を発表

各班が模造紙にまとめて発表した意見は以下のとおり。

※ 【カードに書かれた意見】は事実誤記等を含めて、カード(付箋紙)に記入されている原文を尊重して整理した。

A班

委員：伊藤・福田・中谷・川原

A班の発表の要点：～今を見つめて未来を語る～

- 長期に亘る避難生活、避難先の広域・分散がコミュニティづくりの課題となっている。
- 一人暮らしの高齢者や子育て世代の親は心身ともに負担がかかり、コミュニティづくりの意欲が低下している。
- 避難先が広域であるので、避難先での生活支援や、双葉町への企業誘致・雇用創出など復興へのシナリオをつくり、街づくりも広域な範囲で行うべきである。

【カードに書かれた意見】

《現在の課題》

- 集まれる拠点が必要である

- ・双葉町は特に全国に分散化し過ぎました、今後の拠点重要である。
- ・双葉町拠点を明確化する。
- ・全国から集める拠点はどのようになっていけば良いのか。
- ・町民同士の集まる場所がないので作ってほしい。
- ・今すぐ集まれる場を作るべき。
- ・公営住宅＝町の拠点、ちゃんと出来上がるか。浪江と双葉が1つか。
- ・小規模の集まれる場所を避難先ごとに作る。
- ・宿泊施設（温泉の貸切）が必要である。
- 交通の問題
 - ・集まりがあっても交通手段がない。
 - ・車のない世帯が特に大変である。
- 環境整備
 - ・町外拠点をいわきにということであれば、今から受け入れられる環境整備を。
- コミュニティ形成の問題
 - ・コミュニティ作りの困難さ。
 - ・新しく生活をスタートさせる→連携がない！！知ってる人がいてもしらんぷり、入会してても活動×。
 - ・時間がたつほどコミュニティ形成は難しくなる、意欲低下。
 - ・1世帯、老人世帯の生活の危険。
 - ・格差、分散化しすぎた。時間とともに個人主義が増加。

《達成の手段》

- ・未来までのプロセスをしっかりとしてほしい。
- ・町再生の原動力は何だろう。
- ・双葉の夢は何年後に帰れるのか。
- 企業誘致
 - ・シナリオを作って双葉町の復興。
 - ・産業をおこし企業誘致、整備の推進。
 - ・企業を誘致して経済・雇用をつくる。
 - ・われわれの時代にふるさとの段取りを行う。
- 心のケア必要
 - ・町に戻っても将来的には子供達は戻ってこないで町の将来は暗い。
 - ・賠償金によって不幸になっている人もいる。
 - ・放射能の話がすればゼロになってしまう。
 - ・中学生くらいからの子供達へのケアも必要。
 - ・子供達には不安のない毎日を。

- ・子育て世帯の親へのケアが必要。

《将来ビジョン》

- ・広域的な街づくりが必要。
- ・避難先で生きることを決断した人達への支援を国で。
- ・元の地域？避難先地域？年齢？。
- ・複合型文化センター（双葉郡）。
- ・美しかった双葉町に戻れないなら意味がない、同じ双葉町はつukれない。

B班

委員：岩本・石田・大橋・横山・松本・高田

B班の発表の要点：～復興！？今でしょ！～

- 避難先における、集会所までの交通問題や病院不足が、孤独感や不安を増加させている。
- 放射能についての正しい知識や被爆手帳を作り、弱者への支援を充実させ、交流の場を設置することで、避難住民の健康とコミュニティを維持することが重要である。
- 双葉町については郷土料理などの文化継承のため歴史民族資料館の建設を提案したい。

【カードに書かれた意見】

《現在の課題》

- コミュニティの場づくり
 - ・一般の人も参加できるコミュニティ。
 - ・公営住宅、公園つき公民館のコミュニティ。
 - ・イベントができる（調理できる）施設。
 - ・交流の場に誘い出す、アイデア作り、生きがい作り。
 - ・早期に復興公営住宅ができれば、コミュニティも早くできるのでは。
 - ・郡山市に双葉町の第二の拠点を作る（県の中心地、公営住宅も4ヶ所ある）。
 - ・商工のため土地を安い値段での提供をしてほしい、いわき市でもOK。
 - ・いわきにもコミュニティのとれる場所を数ヶ所作ってほしい。
 - ・町民の集まる場所を作ってほしい。
 - ・コミュニティ施設は町民の意見を取り入れ資金等を自由に使えるようにする。
 - ・各地へコミュニティ施設を設置（建設）する。
- 交通手段の確保
 - ・仮設、自治会等へバスを提供してほしい、小旅行やその他交通手段にしたい。
 - ・集会の場所への交通手段が問題である。

- ・高齢者の方、交通の便がないとひきこもってしまう。
- 医療の充実
 - ・大きな病院（専門）がないので心配である（いわき）。
 - ・早く病院を作ってほしい。
- 文化の伝承
 - ・文化を伝えること、歴史民俗資料館みたいなもの、音声・映像など。
 - ・伝えていく双葉町の民俗資料館のようなものの建設。
 - ・町の伝承文化を次の世代に引き継いでいく場所がほしい。
 - ・双葉の伝承文化を継続するのは難しいのではないか（なぜ子供が少ない）。
 - ・近いうちに文化を伝承する具体的な取り組みを。
 - ・双葉町を忘れないために子供でも分かる本作りをしてほしい。
 - ・町民への発信（子供達へ）。
- 子ども達
 - ・双葉の学校から、子供がいる家族へ（双葉町の）安全と良い所などの情報発信を行う
 - ・幼稚園児、乳幼児を双葉の学校に入れる。

《達成の手段》

- 若者と町のつながり
 - ・若い人は自立していくので、町のつながりを維持するのは困難。

《将来ビジョン》

- 弱者の自立支援
 - ・自立できない人への行政の支援を。
 - ・今の社会の貢献者である高齢者に生きがいを。
 - ・出てこれない方の代弁者になったり、つなぎ役になり生活の不安を軽減させる。
 - ・生活弱者への自立支援のための個別支援を。
 - ・町が頂いている助成金・補助金をもっと我々の作る自治会等へ使うべき（何に使ってるの？）。
- 健康管理
 - ・個人の被爆手帳がほしい。
 - ・正しい知識（放射線）を学ぶ。
- おもてなし
 - ・双葉の人のおもてなしができる、双葉の人が運営する、宿泊施設と郷土料理など。

C班

委員：小川・高野・岡村・山本・齊藤

C班の発表の要点：～机上から現実へ～

- 中間貯蔵・除染問題、避難長期化によるストレスや孤独感から、30年50年先の未来が見えない状態である。
- 復興は、若者が中心となって街づくりを行い、避難先の自治体、福島県とのネットワークの強化が図れるような仕組みづくりが重要である。
- 各地の復興公営住宅をリトル双葉と位置づけ、住民が自立できる支援を行うべきである。

【カードに書かれた意見】

《現在の課題》

- 中間貯蔵・除染の行く先が見えない不安
 - ・放射能の事を言われても住民はどうしたらよいかわからない（判断できない）。
 - ・土地のとられ方、タテ×ヨコだけではない、（精神の）ふるさと問題。
 - ・早いところ除染をしてほしい。
 - ・将来の予測ができない。
 - ・除染の取り組み。
 - ・中間貯蔵施設と除染の進め方が見えない。
 - ・中間貯蔵施設は復興へ足かせになるのは間違いない。
- 自治会へ丸投げするな
 - ・50年30年先どう予想したらよいのか。
 - ・自治会に丸投げするな。
 - ・震災から現在まで、抜けてしまった自分の時間をどうやって、埋めていくのか、どうしたらよいか分からない。
 - ・子供の世代に、どうしたらよいか分からない。
- 関連死・関連病
 - ・住民のストレスケア、うつ、アル中など素人では無理です。
 - ・町民を関連死から、どう守っていくか（関連病）。
 - ・取り組みが遅い。

《達成の手段》

- 若者の就労支援
 - ・若者が働ける場が欲しい。
 - ・若者が中心となって街づくりをしていただきたい。
 - ・若者への期待大である。

●生活力（自立力）

- ・避難先の自治体、福島県とのネットワークの強化、防災・救急救命。
- ・双葉町民との交流は必要だが、そこだけにこだわらず広く地域で生活して行けるようなサポートが必要。
- ・避難先の住民とどのように交流を持って行くか、情報が必要。
- ・積極的なイベント参加。
- ・悩みを共有しあえる人がいるかどうか。
- ・避難している期間に失ったさまざまなことをどのように埋めていったら良いのか。
- ・1日1回会話をしていますか。
- ・生活の場をどこにするのか、地に足をつけた生活ができるように、今後を見据え動向をみながら決めていく難しさがある。
- ・町民が自立して行ける支援、震災後依存心が強くなっている傾向から脱出。

●情報発信

- ・シンボルを作るなど町が情報発信。
- ・町長の行動を情報発信する、もっと励ましになる。
- ・復興支援員を増員させ、各地で避難している人の情報をブログなどに載せて発信する。
- ・タブレット（本当に必要とする情報）。
- ・若手の役場職員から若い世代の意見を聴く場を設ける。

●子ども達への支援

- ・学校が核となる町づくり（双葉町の子供達を育てていく）。
- ・もとの双葉町の学校の再開を望む。
- ・逆境に負けない子供達への支援。
- ・若い世代の良さをきちんと伝えていく。

《将来のビジョン》

●リトル双葉

- ・リトル双葉を充実させ、将来への希望につないだ街づくりを。
- ・核（町の姿）を作り、それとの繋がり方が必要。
- ・復興住宅を中心として、老人が相互に助け合える共同生活の場。
- ・復興住宅を中心として商業施設。
- ・復興は町民の願いである。しかし時間が大事である。
- ・一人暮らしの方の生活のケア。

●浜地区再生計画

- ・両竹、浜野地区から除染を始め、復興の足掛かりとして欲しい。

- ・いやしの場になる施設をつくる（作業員など）。
- ・浜地区から復興の取り組みを始める。
- ・海浜公園を造って。
- ・新しいエネルギー開発のための事業の誘致。
- ・中野・浜野・両竹フラワーロード。
- ゼロからの出発
 - ・“新しい双葉を作る” ゼロからの出発。
 - ・今までの双葉町にこだわらない復興計画（新しい双葉町）。
 - ・早く帰れるような体制作り。

D班

委員：相楽・田中・小畑・岡田・菅本

D班の発表の要点：～頑張れ次世代～

- 地域でなわばり意識があり、コミュニティに入りづらい現状があり、夢ある復興の姿は考えられない状態である。
- 次世代を担う子供達のために雇用の場を確保し、双葉町の歴史が途切れないうようDVD等で資料を残していくべきである。
- 避難先や世代など立場の違う人々の意見を尊重することを前提に、ふるさとの復興を考えることが重要である。

【カードに書かれた意見】

《現在の課題》

- 夢と現実のギャップ
 - ・夢ある復興の姿を描きたいが、現実とどう結びつけて良いか考える。
 - ・国・県・町が将来像をはっきり示さないと復興の議論は難しいのではないか。
 - ・現時点で双葉町の夢ある復興の姿は考えられない。
- コミュニティに参加できない要因
 - ・加須はいわきのコミュニティに入りづらい壁がある。（なわばり）
 - ・今あるイコイの場に行きづらい→なわばりがある、世代・子育てなど。
 - ・コミュニティ→悪口をいう場になっている→はけ口にもなる。
- 研究所の誘致
 - ・太陽電力ばかりではなく、エネルギー研究所をつくり若者の仕事を確保。
- 子供は天才
 - ・子供はコミュニケーションの天才→他地区でもOK。
 - ・若い世代のコミュニティをどう考えればいいのかを、若い世代の方に聞いてみたい。
- イベントの開催

- ・各行政区の年 1 回の集いの中で参加者を多くすることで絆をつくっていききたい。
- ・公営住宅ができれば新しいコミュニティが出来ると思う、祭りやイベントの開催・誘導を考える。
- ・役職のある方が引き続き連携を。
- ゆとり世代の就職
 - ・いわゆるゆとり世代の就職について考えたい、意識改革が必要。
 - ・必要性を感じさせる。
- 訪問でコミュニケーションの強化
 - ・子供や高齢者など自らコミュニティ形成が作れない町民の支援を第 1 優先課題とするべき。
 - ・好き・嫌いがある、農家・一匹狼→参加しない。
 - ・集まりにくい出不精の人もある、心の病の方など。
 - ・役職のある方は特に積極的に。
 - ・訪問をしてコミュニケーションを図る、強化しても良いのでは。
- 身近な場所
 - ・近いと行きやすいけど、遠いと足が遠のく。
 - ・コミュニティの場所を、細かく作ってほしい。
 - ・仮設住宅・個別訪問→全域区にも公民館・集会所はほしい、現在片道 1 時間。

《達成の手段》

- 残したいもの
 - ・子供達に双葉町の歴史・文化の継承が大事、震災当時の記録、子供達を含む写真、作文などを使っても良いかなと思います。アルバム・ビデオなどで(DVD)。
 - ・子供達(我々)の記憶が薄れないうちに記録を作っていけばいいと思う。

《将来ビジョン》

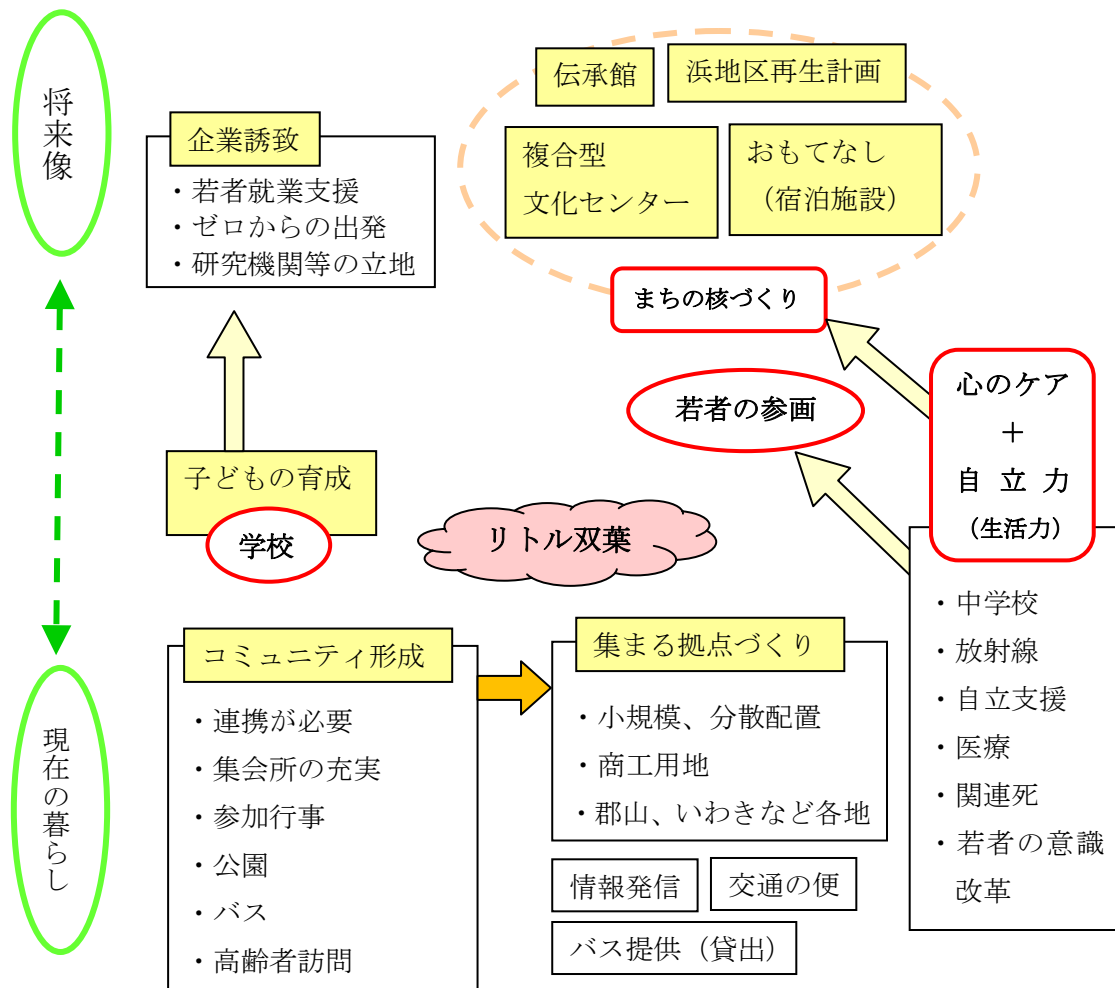
- 次世代の意見を聞きたい
 - ・何十年後かわからないが、必ず復興すると思っている、その時に現在の人々と入れ替わっているかもしれない、子供達に聞いてみたい。
 - ・歴史的財産は行政で管理してもらう必要があるが、それ以外のは私たちの年代よりも若い世代に意見を聞く必要がある。
 - ・県内外に避難を余儀なくされた結果、現在の地への永住を決めた方の考えも、お互いに尊重することを前提にふるさとの復興を考えることが大事。
 - ・復興住宅の集まりには学校(子供が集まる)、色々な施設、病院、商店街が出

- 来て双葉の雰囲気が残った町並みがあり、いつでも帰れるところ。
- ・ 少子高齢化で若者が減少→経済と活気を失う→自治体運営にひびく。
 - ・ 若者が参画できる仕組みの創出が必要である。

○各班の発表を受けて、コーディネーター金子氏が全体のまとめを行い、以下のとおり説明した。

今回の座談会(ワークショップ)のまとめ

- コミュニティの維持・形成のためには、分散型拠点(リトル双葉)をつくる。
- 町民の心のケアだけでなく、自立支援を行い、意識改革を促す。
- 若者の就業支援のため、企業を誘致し、まちの核づくりを行う。



○ 各班の発表に対して町長及び委員長から講評を行った。

3. 閉会

以上

第7回双葉町復興推進委員会座席表(グループ発表・全体討論)

(敬称略)

1 日時 平成26年5月29日(木)
13:00~16:30

2 場所 双葉町いわき事務所 2階大会議室



復興庁
佐藤 弘之
企画官
復興庁
石川 悟
参事官補佐
復興庁
福島復興局
須田 亨
参事官補佐
福島復興局
いわき支所
芳賀 克男
所長
福島県
避難地域復興課
根本 朝彦
主査
福島県
生活拠点課
渡邊 隆幸
主任主査

猪産 狩業 建設 浩設 課長	山税 本務 課一 長 弥	平秘 岩書 広報 弘課 長	船総 来務 課長 丈夫	武総 内括 参事 裕美	伊町 澤長 史朗	間委 野員 一長 博	半副 澤町 長 浩司	半教 谷育 長 淳	松住 本民 生活 英課 長	志生 賀活 支援 課長	大健 住康 福社 宗重 課長
----------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------	----------------------	----------------	---------------------	---------------------	--------------------	---------------------------	----------------------	----------------------------

事務局(復興推進課)			事務局(復興推進課)			事務局(復興推進課)			事務局(復興推進課)		
小支 山援 員 勲	由支 波援 員 大樹	西主 牧事 孝幸	橋主 本查 靖治	細課 澤長 補 界佐	駒課 田長 義誌	今教 泉總 祐務 一課 長	山議 下会 事 正務 夫局 長	半會 谷計 管 安理 子者	山副 下主 查 明弘	伊支 藤援 員 壽紹	山支 中援 員 啓稔